

Digest of Science of Labour

労働の科学

2023
February
Vol. 78, No. 2



チューリップハット／菅沼 緑

特集

災害を他人事にしないために

音楽を通じた被災地支援のカタチ／松下英爾
被災地に寄り添い続けて／陸前高田を勝手に応援する会
災害時のトイレ環境改善に向けた取り組み／日本トイレ研究所

連載

漂流者たち—クミジヨの肖像②③
本田一成

凡夫の安全衛生記⑦②
福成雄三

大原記念労働科学研究所

連載

ILOインド南アジア産業安全保健通信②
川上 剛

巻頭言

まずやってしまっ、後で謝るの原則
福島 章

労働の科学

2023
February
Vol. 78, No. 2

巻頭言

俯瞰 (ふかん)

まずやってしまっ、後で謝るの原則

1

福島 章 [大原記念労働科学研究所 常務理事]

表紙作品：菅沼 緑「チューリップハット」
材料：鑄鉄にラッカー
会場：椿近代画廊（新宿）
年度：1968年
撮影：菅沼 緑



災害を他人事にしないために

音楽を通じた被災地支援のカタチ

雲仙・普賢岳噴火災害の場合 [行政書士] 松下 英爾 4

被災地に寄り添い続けて

..... 陸前高田を勝手に応援する会 12

災害時のトイレ環境改善に向けた取り組み

..... [NPO法人日本トイレ研究所] 加藤 篤, 松本 彰人, 島村 允也 17

Series

ILOインド南アジア産業安全保健通信 (2)

労働における基本的原則と権利としての安全衛生

-インドの綿花栽培農家支援プロジェクト- 川上 剛 22

Series

芸能従事者の今 (18) フリーランスのストレスチェック	森崎 めぐみ	26
「#教師のバトン」で伝わる (20) 教職員の過酷な勤務環境	藤川 伸治	30
漂流者たち クミジョの肖像 (23) 『クミジョ白書2019』と『同2021』のはざままで	本田 一成	34
凡夫の安全衛生記 (72) 「支えてもらった」身近な上司, 同僚	福成 雄三	36
労研アーカイブを読む (85) 高速道における適切な車間距離	椎名 和仁	38

Column

つれづれなるままに 妊産婦手帳と母子手帳, そして母子健康手帳	千葉 百子	43
自由と想像 (2) 彫刻に向かって	菅沼 緑	49
BOOKS 『従業員エンゲージメントを仕組化するスキルマネジメント』 人と組織を甦らせるマネジメント	編集部	52
労働科学のページ		53
次号予定・編集雑記		64

まずやってしまつて、後で謝るの原則

福島 章



ふくしま あきら
大原記念労働科学研究所 常務理事

2年前に役所を退官した直後、ある人から「これを読んでみる」と本を1冊いただいた。寺島実郎氏の「ジェントロロジー宣言」という本である。ジェントロロジーとは、「定年退職後30〜40年生きねばならない100歳人生の時代」であつて、高齢者を社会参画させ活用するプラットフォームの創造を探索する社会学である。再武装システムの構築の試み」だそうである。当時の私は、長い間携わつてきた仕事や組織から放り出されて落ち着かない時期でもあり、それなりに面白く読んだと思うのだが、どういうわけか記憶に残つていないのは、本筋の話とは関係のない数行であつた。寺島氏は言う。「戦後日本の社会科学教育を眺めていると、当然学ぶべき事柄が欠落していることに気づかされることも多い。もつとも大きな問題は、戦後の日本人が日本近代史を十分に学んでこなかつたことである。日本近代史に対するしつかりとした認識を持つた大人が非常に少ない。明治維新以降の近代史を知ろうとすれば、日本が道を踏み外し、戦争へと突き進んでしまった誤りに向き合わざるを得ない。それを避けてきたのではないか、というのである。

選択したので、さすがに教科書は最後まで読んだけれども、第2次世界大戦以降はどうせ試験に出ないだろうと、一通り目を通した程度である（実際、試験には出なかつた）。近衛文麿や東条英機からは記憶に残つているが、満州事変から日中戦争、太平洋戦争へと、日本を破滅に引きずり込んだ帝国陸軍の永田鉄山や石原莞爾、武藤章といった人たちの名前はかすりもしなかつた。

寺島氏に触発されて、ぼちぼちと日本近代史の本を読み始めて驚いた。軍部首脳は天皇陛下の命令に従わない。満州にいた関東軍は当時の首相や参謀本部の指示に従わない。挙句の果てには、中堅将校連が上官を突き上げ、自分たちの意に沿わないと血なまぐさいテロ事件を引き起こす始末である。

やはり組織というものは秩序こそが重要だと唸つていたら、「まずやってしまつて、後で謝るの原則（塚本一也・R&Dコンサルティング）」というインタビュー記事が目飛びこんできた。その記事曰く、「社内ではアイデアを提案してもいろいろな批判・反対の声が上がり、つづぶされてしまいかねない。新しいことを進める人間として、その内容について極力分かりやすい説明ができるように最大限努力することが、まずもつて大切である。その説明努力を十分にした上で、それでもなお理解されずに進めなくなりそうなとき、意識すべき行動原則の一つが「まずやってしまつて、後で謝る」

だ」というのである。

確かに、このやり方は功を奏する局面もありそうである。問題はこれが「原則」となつてしまう恐ろしさだ。昭和6年、柳条湖事件が起き、満州事変が勃発する。満州全土には関東軍の20倍の敵がおり朝鮮軍の助力を求めたのだが、戦線拡大に反対する天皇は「まかりならん」の一点張り。その時、林銑十郎朝鮮軍司令官は陛下の命令もなく、朝鮮軍を満州入りさせる。陸軍刑法に基づけば死刑に相当する。この報告を受けた当時の若槻禮次郎総理は「なに？ すでに入つてしまつたのか。それならば仕方ないじゃないか」と反応した。いつの時代も功を焦る者はいない。「仕方ないじゃないか」が原則になれば、組織の籠が緩む。満州事変は日中戦争と呼び、さらに太平洋戦争へと拡大して、やがて日本は焼け野原になるのである。

